それこそ眞実に
新妻であり母である妾のこの胸は
女性らしい満足にいそいそと暮したの
恋しいその男は花と蝶の様
慕ひ慕はれつ妾の永遠つれ添ふ夫であり
雄々しく勇敢に人の世の階段を
一歩一歩ふみしめて行って下すったから
それに妾の乳房に縋る可愛い嬰子は
すくすくと丈夫に大きくなって行ったから

それこそ眞実に
處女の時に遠い所に望み胸に畫いた
美しく清い理想と憧れた樂園は
一日一日妾等の進む一直線上に
近づいて来る様に思へたから

それこそ眞実に
妾は高い雲の上の見晴台から
美しいパノラマを見下す様に

世の中や妾の人生を心なごやかに
眺めることが出来たから

それにそれに
今はどうでせう
あの様に美しかった顔容も
あの様に滑らかだった妾の肌の豊麗さも
あの様に張り溢れた若やぎも
熱い妾の胸に沸々と湧きかへった
数々の明るい理想も
跡形もなく消え失せた

妾のためならどんな辛苦も軽々と
笑ふて耐えた妾の愛しい夫も
満腔の希望の玉であった最愛の愛児も
妾を育て孚むだ両親も
呼べど答へぬ捜せど姿を見せぬ
奥津城の永遠静かな冷い墓場の床に
消え去った

そして今では氷の床か針の床の様な
慈善病院の床の上老ひ皺枯れた生きた屍を
横たへて寂しい思ひ出の水の面うち眺め
その昔妾のこの胸に
仄かに赤や青紫や黄に咲き出でた
夢や幻に悲しい冷い涙をふり落す
月も花も羞ぢて帳の影から横目で垣間見した
程のあでやかで美しかった有情の花も
雨に打たれ泥土にまみれ
哀れ凡の望は消へ失せて果なく散って行く

鐘の聲

あゝ鐘声が
聞え来る
劈く如く滲み入る如く
水底深く沈み行く如く

何処からか
あゝ鐘声が

我が胸を切る如く
響き来る
我が心はメスに觸れし如く
氷塊に觸れし如く
東へ戰く

あゝ鐘声が響き来る
それは現世の響でない
あの世の響だ
幽冥の響だ
合掌の響だ
悩みの響だ
涙の響だ
滅入る響だ

深夜ゴーンと響き来る
まるで釣瓶おとしの様な響だ
暗夜何人かに追ひ縋られる響だ
あゝ鐘声が何処からか響き来る

其の時私は湖畔の家に寝てゐた
時計は十二時を打った
時は寒い寒い
手足の凍る様な冬だった
寒風は外を颯々と吹き過ってゐた
二階には老父が病の床に
臥せてゐられた
私は正月の休暇に懐しい父母の家に歸って
楽しい夢を見ようとしてゐた
その夜の事だった

今もおゝ鐘声が
何処よりか響き来る
この胸にこの心に

自然と享楽

心の飽楽に涙ぐまし
光は流れ波は光る
せして静かで力があり
微妙なる調和と技巧がある
遊け難い威厳の力がある

清き白砂
美なる山容空の光彩
すべては偉大で滑かで魅力があり
平凡で深刻な審美が潜んでゐる
せして満足と享楽と詠嘆とを感じる

そして此の陶酔の瞬間にも
血は循環り脈搏は震へ
大地は回転り時は動き行く
永遠の軌道の上を
　朗かなる小春日和風光美なる某海浜にて

浜の燈台

白々白い板白い板塀
白い燈台の建物
砂々々

乾魚の香熱砂のいきれ
紺碧の海々
金石の荒磯に砕け吠ゆる北海の怒濤
銭屋五兵衛に因む煎餅

銭道馬車から下りて
日傘かざした若き母に手を引かれ
ざくざく砂を踏みしめて
眞白い燈台の横を通って
浜へ浜へ出た

こんな記憶が今懐かしく
お伽噺の国にあった事の様に
私の心にどうかすると鮮明に出て来る
それは私の十一、二才頃の夏の事だった

私はあゝその頃が懐かしい
私は千金に譬へ難ない宝を懐に抱いて
ゐた様な気がする
だがたが私には今それがなない

永遠に私の心の上に歸って来ない
その頃私には熱情も恋も
詩も理想も大きな夢も未心の中に
動いてゐなかった芽生へてゐなかった
だがだが夢よりも恋よりも
理想よりも懐かしい
放浪者が昔去った郷国を慕ふが如く
ユダヤ人が遠き昔亡びた母国の故地を
慕ふが如く
私はその頃を懐かしくしのび思ふ

白い燈台の板塀優しい砂
怒れる荒波の姿が
我が脳裏に浮び出る時
私は波の音を乾魚の匂を
耳に鼻に感じ
私の瞬間は二十幾年の昔に歸へる
二十幾年昔のお伽噺の国と
二十幾年後のまざまざしい現実の姿との
瞬間が相隣りして交錯する時

私の胸は痛い痛い悲しみを感じ
我が頭は千貫の石に
壓迫せられるのを感じる

女たらし

女　あなた位ずうずうしい人ったら
　ありやしないわ
　嘘をいってさ
　その嘘も事によりけりだわ
　奥さんがあるのに
　僕まだ独身だよって
　をまけに養子先は離縁になってゐるのだって
　ほんとに貴男といふ人には
　あきれたわ

男　何を言ってゐるんだ
　僕が一寸優しくして君の傍によった時
　僕の気を引く様な甘い言葉を言ったのは
　何方が先だったんだ
　君だらう
　君はいゝ年をして馬鹿なんだ
　大体男ってどんなものか知らずに
　甘い言葉を何の考へもなしに
　男に進呈するなんて低能女だよ
　わからなきや言ってやるかね
　男って者はね
　君から捧げられた様な甘い言葉を受けて
　僕には妻があるのだ養子の身だと
　いふ様な正直な気を
　持ち合せてゐないのだ

女　あなたはそんな事を
　平気でまだ言ってをれるのねえ
　妾の心を盗んでさ
　さんざお金を使はしてをいてさ
　妾の世間に対する面目を踏みにじってさ
　この人でなしの人間の衣をきた
　女たらしの動物みたいな男ったら

男　何んとでも言ふさ
　結局ぬすまれた者が盗まれ損に
　なってゐるじやないか
　今さら死んだ児の年を数へる様な
　愚痴はいふなよ
　君の馬鹿を一層表明する様な者だよ
　そんな事をどなり立てゝいりや
　一層この後良縁のさし障りになるぜ
　君は馬鹿だなあ

女　悪魔悪魔
　あんたの様な人には
　ろくな運が廻ってはこやしないわ
　自動車にしかれて死ぬに定ってゐるわ

男　大きにお世話だ
　自動車に轢かれようと
　人に殺されようと
　ねえ君君
　今でこそそうは言ってゐるが
　ついこの間まで今罵ってゐる僕に
　もたれかゝって僕の手を懐かしそうに
　かたく握ったじやないか
　そう大きな口をきかれたがらじや
　ないだらう

女　あゝ悔しい
　この人でなし

男　たんとお泣き
　あしたまでもお泣き
　泣きや胸がおさまるだらうよ
　ははゝゝ

関ヶ原

それは関ヶ原の戦の前の夜の事であった
三成は寢室に入って寢ようとした
けれども目がさえて寢られなかった

明日は豊家一党
反家康派の勝敗が決する運命の
分れ目であったからであった
つい一刻前までの會議の様子が
島津毛利大谷長曽我部等の
激論の様子が目の前にちらついた

三成は深々と更けて行く
戰陣の一種名狀し難い気配が
陣屋の屏を寢殿の壁を底を
通して夜着の上にまで迫るのを感じた
しかも今夜程懐愴味を帶びた
戰陣の夜気を感じた事はなかった

彼の胸は何かの不吉な予感に怯える様に
動悸打ってゐた
不敵な彼は何馬鹿な
明日の戰は西方の勝利だと
強く無言で心の中で叫んだが
胸の怯える様に動悸打つのを

どうすることも出来なかった

彼の心は恐ろしく痛々しいまでに
緊張しきってゐた
彼の生涯中之程までに
緊張しきった事はかってなかった
自分でも余りに堅苦しい
緊張さに驚く程だった

これまで幾度の戰や重大なる危期に
彼の緊張を必要とした時の彼の態度
それは明朗そのものであった
絶対に敗戰を予期しない
唯勝利に対する緊張だった
唯御大秀吉に対する危期に対する措置
注意の疎漏がなかったかを
心配する緊張に過ぎなかった
それがどうであらう
今夜の緊張それは
どう見ても明朗でなかった

陰惨そのものだった
勝利を確信してもその下から
下からもしや敗戰しはしないかとの
懸念が次から次へと頭を擡げて来るのを
どうすることも出来なかった
彼は思った
西方一党の運命を決する前一夜の今夜
初めて御大秀吉の偉大さを眞実に
知り得た様に思へた

何に家康如きがと思っても
何んとしても胸に千貫萬貫の重石の様に
感じるあの家康を一言半句も言はさず
臣屬せしめてゐた秀吉の力量の偉大さに今夜
今更ながら感心せずにはゐられなかった

彼は更け行く時刻にうとうとゝしながら
あゝ俺にせめて百五十万石の実力があれば
強くしっかと西方を統轄し
戰はずして彼家康を慴伏せしめ得るのに

なあと思ひつゝ
うつらうつらと眞夜中を過ぎて
夢路を通ふてゐた

明くれば乾坤一擲
この不世出の才人の運命を決する関ヶ原の
戰は西美濃の野に展開せられて
勝利は東に期した
そして唯一夜を隔てゝ王侯の貴さから
三成は哀れな落人の境涯に落ちて行った

あの人が愛しいの

妾はあの方が愛しいの
なぜってなぜって
わけなんか有りやしないのよ
あの人に様々な幸福を購ふお金がなくても
誇らしい地位がなくても
妾はあの若杉の様に若々しく
精力の彫像の様な雄々しい

あの方が愛しいの

あの方の断力のある声
優しいが弱い者を大きく包み
こむ様なその声
優美な者の寄り添ふに相應しいその姿態
それを聞くさへ見るさへ
妾のこの胸は言ひ知れぬ喜びに
ふるふのよ
なぜってなぜって理由なんかありやしないのよ

精力の奔走り百千の障碍を突きのけて
邁進する様なあの方の
力強さが妾はいとしいの

妾の好きな
あの方は妾にとって妾を強く引き寄せる
たのもしい磁石です
妾は神かけて祈るのよ
いとしいあなたの磁石様

何時何時までも妾を引きつけて
いて下さいと祈るのよ
ねえ愛しい愛しい妾のあなたよ
棄てないでねえって祈るのよ

妾の胸の鏡にあの方の
恋しい映像がうつる時
妾は気も軽やかに喜びに打ちふるひ
はしやぎたくさへなって来る
うっうっと沈みきってゐた妾の心の
曇空にも青空が見えそめて
暖い春の滋光に照らされてとても朗らかに
小唄の一つも歌ひたくさへなってくる

なんてあの方は妾にとって
大きな魅力ある力だらう
なぜってなぜって理由なんかありやしないのよ

足踏しようじゃないか

二十世紀の胸にかい抱かれてゐる
二十億の民よ
お前等は今世紀の初頭にあって
何を考へてゐるのか
お前等には沈思と默考が缺けてゐる

彼等は皆自分で自分の身を
持てあましてゐる
彼等は望み憧れてゐる
幸福は與へられないといふた方がよい
彼等は蹶きに蹶いてゐる
少しの落着きがない
巨億の民は涙に泣きぬれてゐると
いふた方がよい
彼等は一体行末はどうなるのだらうと
いふ不安に駆られてゐる
欧洲もそうだ

東洋もそうだ新大陸もそうだ
彼等の頭は充血しきってゐると言ふても
それは誇張した言だとは
誰も言ひきりはしまい

世界の民よ
お前等は沈思と默考を忘れてゐる
それはキリストや釈尊や孔孟流の沈思と
默考ではない
お前等の生存とその存續條件は
お前等の偉秀な智能によって
他の動植物を恐れはばかる事なく
既に既にとくの昔に
完成せられてゐる筈だ
それだのにお前等は進め前進を
ばかり考へてゐる
無限の擴大をばかり考へてゐる
そこにお前等の不安と充血と焦燥と
不満と不安があることに気がつかないでゐる

お前等は人類生存のあらゆる方面に
足踏をすることを
念頭に浮べたことがない
ステップの中に全人類を狂喜せしめ
幸福を得せしめる態様があるといふ事に
考へ及んだことがない
お前等は永久に駆足ばかりしてゐよと
天から命ぜられたのではよもやあるまい
静かに考へて見よ
自分が愚かしく息ぎれそうに
性懲りもなく駆走を續けてゐるのに
氣がつくではないか

二十世紀の胸に抱かれてゐる
二十億の悩み苦しめる民よ
幸福を願ふて得られず
かへって苦悩の中に深く深く
はまりこみ行く愚かしくも哀れなる民よ
進め前進の智能の方向を変へて
止まれ足踏の方向への轉向を試みては

どうであるか
如何に円滿に如何に面白く
如何に智的に如何に無理のない様に
如何に悠揚迫らない様に
如何に飽きのない様に変化のある様に
全人類がステップを踏むべきか
一度でもよい考へてみてくれ

お前等の待望する英雄は
シーザーであってはいけない
ヒトラであってはいけない
ムッソリニであってはいけない
レーニンであってはいけない
彼等は何時何時までも
否永久に益々全人類とその子孫を
駆足の苦悶の中に追ひ込み
その上に拍車をかける様なものだ

お前等の待望する救世主は
キリストではない

釈尊でもない孔子でもない
彼等は一言も人類に対して駆足を
緩めよとも止めよとも啓示してはくれなかった
お前等の待望する新英雄と
新救世主は全人類にその生存の
あらゆる方面に於て円滿甘美なるステップを
踏ましめてくれる偉人でなければならない

巨億の民よ
お前等の求め憧れる
幸福は何処にあり
蛇蝎の如く忌み嫌ふ不安と苦悩と涙が
何処にあるか駆足をしばし止めて
静かに考へてみようではないか

誰か妾の胸に火をつけてねえ

よう妾の胸によう
このわなきなく胸によう
どなたか火をつけてねえ

さあ早くつけてねえ
燃え上らう
眞紅に燃えて燃え上らうと
妾はそれぱっかりを
願ってをるのよ
憧れてゐるのよ

だけどだけどどなたも火を
つけてはくれはしないのよ
全く妾はいらいらして
ぢっとしてはゐられない

すっとマッチを擦って
この熱い妾の胸の燈心に唯一寸と
觸れてくれさへすれば
さうしてくれさへすればねえ

鬱積して爆発を待ちきってゐた妾の熱情は
どんなに快よく何もかも忘れてねえ

身も魂も燃焼の甘い陶酔の中に
とろけこむだらうにねえ

だからねえよう妾の胸にようわなくこの柔かい胸にようどなたか火をねえ早く早くつけて下すったらねえ

妾はどんなに嬉しかろ

その後がどんなになったって
灰になったって評判が悪くなったって
そんなことなんか構っちゃいられない
そんなことなんか口火を待つばかりに熱しきってゐる妾には心配なんかしてゐられない

悅樂の國 終

悅樂の國

（不許複製）

昭和十年四月二十日印刷
昭和十年五月一日 発行

非賣品

著作兼発行者 大阪市西成區柳通四丁目八番地 小野忠夫

印刷所 大阪市西成區桜通二丁目十七番地 小泉工房

印刷者 小泉與吉

発行所 大阪市西成區柳通四丁目八番地 小野忠夫

終